



中部大学春日丘高校 SGH課題研究

グローバル課題4領域について知り・気づき・探る学習 ～ 環境・エネルギー ～

I 取り組みの概要(3時間完了)

- 講演とグループ討論：9月3日(土) 3. 4時間目 中部大学55号館
外部講師：中部大学国際関係学部 加々美 康彦 准教授
- 事後学習：9月6日(火) 7限目

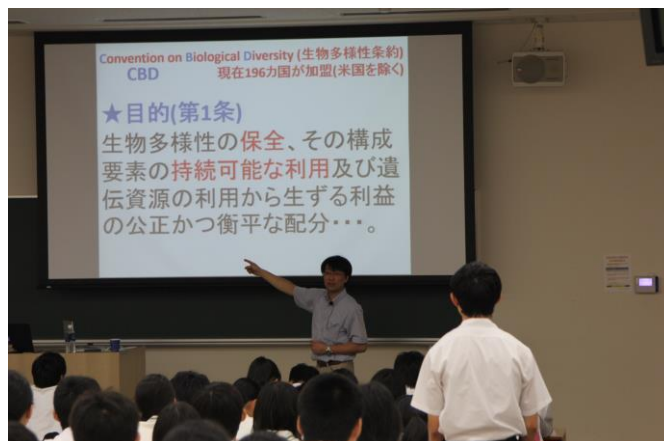
II 外部講師による講演

- 講演
講演者 中部大学国際関係学部 加々美 康彦 准教授
「国際的な視点から考える地球規模の環境問題」

グローバル課題4領域について学ぶ。最後の領域は「環境・エネルギー」です。今回は現代社会が抱える地球規模の環境問題である地球温暖化と生物多様性の保全について中部大学国際関係学部 加々美 康彦 准教授から、国際法の視点で講義をいただきました。

まず、地球温暖化 Global Warming について、温室効果ガス Green House Gas (GHG) と地球が温暖化するメカニズムについて説明がありました。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)によると気温上昇は CO₂ の累積排出量と比例しており、気候変動が起きていることは疑いようのない事実で、人為的である可能性は95%以上であることが示されました。温暖化の結果引き起こされる主なリスクについては、海面上昇による生活空間やインフラの損失、気象現象の激化による災害や食料不足、生態系への影響で生物多様性の損失など深刻なものばかりでした。

地球規模の環境問題は一国の取り組みでは解決できないため、1992 地球サミットがリオデジャネイロで開催され、「気候変動枠組条約」と「生物多様性条約」の極めて重要な二つの国際条約が締結されました。その後も国際社会は具体的な対策として1997 京都議定書、2015 パリ協定と国際的な約束をしてきましたが、温室効果ガス GHG による気候変動は食い止められてはいません。その理由は、条約とは批准した国だけが拘束されるものであり、主要 CO₂ 排出国が批准していな



いことや、途上国であることを理由に努力目標のみとなっていることが原因にあります。つまり、自国の発展・開発と GHG 削減目標とを秤にかけて、純粋に地球温暖化防止だけを考える国が無いためだと指摘いただきました。

生物多様性条約 CBD については、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性の3つの観点があり、それらをどのように保全していくか、資源として利用する際に持続した利用ができるようにしていくかが決められました。2010年には名古屋で COP10 が行われ、保護区の設定や行為規則などが細かく規定された名古屋議定書が締結されたことが説明されました。

Ⅲ グループディスカッションと講演者への質問

講義を聴いて、生徒によるグループディスカッションを行いました。まず、個人で「発見したこと・もっと知りたくなったこと」をプリントに記入し、グループで発表して話し合い、知りたいことを班で1つ選んで講演者に質問をしました。以下に質疑の例を挙げます。



- 地球環境が壊れて人類が生存できない星になってしまったら、国の利益とか言っていられないことに各国は気づいているのか？
- 日本は 13.8%の削減目標に対してどの程度達成できているのか？
- そもそも温室効果ガスをどうやって測って数値化しているのか？
- アメリカが CBD に加盟していない理由と加盟しないことで得られるメリットは何か？
→その条文にある「遺伝資源の利用から生ずる利益の公正かつ公平な配分…」から、バイオ産業における莫大な利益を独り占めしたい思惑から批准していないバイオテクノロジー先進国（日本もその一つ）があることを説明していただきました。
- 日本は人口が少ないにもかかわらず CO2 排出量で上位にいるのはなぜか？どうやったらアメリカや中国が条約に参加してもらえるのか？

講演の最後に、加々美先生から

- ☆国際社会では、正解のない問題が多い。
- ☆環境問題はピンチでもありチャンスでもある。
- ☆より良いと思う道を見つけ、他国の支持を得るためのルールメイキングがとても重要である。
- ☆持続可能な開発の実現のため、日本はお金を出す以外に何ができるか考えてみよう。

とのまとめをいただきました。

Ⅲ 事後学習

環境・エネルギー領域の事例をさらに知り問題解決の方法を考えるために、加々美先生の講義でも触れられていたパームヤシから取れるパーム油について参加型の手法を用いて体験的に探りました。

まず、パーム油についてのクイズにグループで取り組みました。画像資料を見ながらマレーシアやインドネシアの大規模プランテーションの様子を学びました。つぎに「パーム油農園開発計画関係者会議」と題して、先住民の村長役、政府高官の役、日本の洗剤メーカー社員の役などそれぞれの立場になりきってロールプレイング形式で会議を行いました。これによってそれぞれの主張にきちんとした理由があり、立場が変わればどれも正しいことを気づきました。次に演じた役を離れて、「先住民の暮らしを守り、かつ、持続可能な開発のあり方」という視点でグループディスカッションを行い各グループでの話し合いの結果を発表しました。



Ⅳ 生徒たちの振り返り

今回の3時間の学びで生徒たちはいろいろなことを考えたようです。以下にいくつか紹介させていただきます。

- 環境問題だけを考えている国はなく、他の国に押しつけよう、他の国を弱めようなど様々な思惑の中で問題解決のための条約が作られていることを初めて知りました。国家としての思惑を考える前に、地球という大きな視点を持つ必要があると思いました。
- 環境保全がもはやビジネスになってきていることが問題だと思う。お金でしか解決できないと分かっている、なぜそのような政策を実行しようとしているのか疑問に思った。
- 日本だけが努力しても二酸化炭素が減ることが無いと分かりました。今の国際社会が協力できていないことも分かりました。地球は昔みたいには戻ることがないのでしょうか？
- 科学技術の発展でCO₂排出量が増えた。逆にCO₂を減らす科学技術は開発できないのか。
- 何か物事を行おうとするとき、現地の人たちの暮らしも変えないといけないことが分かりました。
- 途上国の人が開発して国を発展させ裕福になりたい気持ちも分かる。でも環境問題が深刻化している中で無秩序に開発して良いわけではない。両方の意見に耳を傾けてバランスを保てる方法を考えていかなくてはならない。
- あらゆる問題にBestな答えはない。少しでもプラスに働くようなBetterな答えをあきらめずに追求することが大切である。